

源義經

第五卷



村上元三

村上元三

源
義
經

第五卷

朝日新聞社

源義經 第五卷

定価 三三〇円

著者 村上元三

昭和四十年十二月十日発行

発行者 朝日新聞社 足田輝一

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

東京
大阪
名古屋
九州

第五卷 目次

潮	源平絵巻	五彩の戦い	屋島攻め	あずさ弓	八葉の車	悲劇の序曲	八条河原
.....							
二七三	二九	二四	九	九	九	六	三

千珠満珠……………一七

壇ノ浦……………三〇

船いくさ……………三三

落日……………三六

都大路……………三二

宿運……………三〇

雲のゆくえ……………三九

装幀 橋本明治
挿画 木下二介

源

義

經

村

上

元

三



八条河原

もと源氏の所有した地所、というだけで、平家のさかんないだは、源氏の一族が定住していたこともない。武家作りの屋形が、わずかに二むねほどあるきり、猪隈（いのくま）の中納言源雅頼がここを保管している形で、ときどきはこの屋形へ訪れ、客を招いて宴を張ったりしたことがあった。

だから、無人というわけではなく、留守居のようにして老夫婦が住んでいるだ

けだったが、にわかに大ぜいの人々が入り、屋形の増築と手入れにかかったのは、この二月に入ってからすぐであった。

ここは、六条の大路が、堀河に突き当る角のところにある。前を堀河が流れ、四方を道に囲まれている。うしろは、小路へだてて法皇の六条の御所があり、そう減多人物の住めるはずがない。

何びとが、ここのあるじになるのであらう、と通りかかる人々は噂をしていたが、その疑問は、二月の五日ごろになると解けた。

屋形の工事の指揮をとっているのが、三条の金売り吉次、とわかったからであった。

いま平家との戦いに出ている九郎義経が、ここの新しい屋形のあるじとなるに違いない。

摂津の国で、平家と源氏のあいだに、もう合戦が始まったのかどうか、都の者たちにはわかっていないが、その結果で都の様子も一変するのではないか、と気にする者も多かった。かつての平家の勢いは強大であり、華やかであっただけに、それとは縁のない市井の庶民にも、やはり忘れ難い夢となって残っている。

もしも源氏が勝ったら、荒くれ者の坂東武者が都を横行し、木曾勢が威張っていた時と同じようになるのではないか、というおそれを持つ者が多い。

しかし、それとは無関係に、この六条堀河の屋形は、昼夜兼行で工事が進められて行った。

吉次の豊富な財力と経験と、都の上下に信用のある吉次の力が物をいって、一夜明けけるごとに、この前を通りすぎる人々は、ずんずんと屋形が形を変え、築土や庭の修理が進行しているのを見て、眼を丸くしていた。

毎朝、吉次は、三条の屋敷から、この屋形の工事場へ顔を出し、いろいろと指図をしている。

ここ数年のあいだに、吉次はまた、頬のあたりに肉がついた。小鬢のあたりには白いものが混りはじめているが、それは、老けた、というような印象は与えない。ますます吉次という人間の幅が出来てきた、という感じであった。

陸奥国平泉から、深い雪を踏んで出立してきた吉次は、宇治川の合戦には間に合わなかったが、猪隈中納言雅頼から言われた、九郎の新しい住居を作るこの仕事を、九郎へ対する新しい奉公の一つ、と考えている。

一昨年、鎌倉にいる九郎のところへ、吉次は訪れたことがあるが、そのころの九郎は、まだ兄頼朝の幕下のような身の上であったし、頼朝も吉次の来訪を喜んでいない風なので、吉次は、すぐに鎌倉を去って、京から平泉への旅を続けた。

しかし、こんどは吉次も、だれに気がねもせず、九郎のために尽すことが出来る。源雅頼の声がかりもあることだし、源氏の将九郎義経のための新しい屋形を作ることは、吉次の誇りでもあった。ちょうど十年前、自分が、ひそかに鞍馬から連れ出した稚児の遮那王が、いまは京師ではだれ一人、名を知らぬ者のない武将になっている、と思うと吉次は、大切に育ててきた珠玉が、輝かしい光を放って世の中へ出たような喜びを覚える。

自分の持っている財力のすべてを授げ出しても、惜しくはない心地であった。

七日の夜半、三条の吉次の屋敷へ、駿河の次郎が帰ってきた。

「吉次どの、およろこびなされ」

駿河の次郎は、長い顔をなお長くして、にこにこしている。馬を走らせ続けてきたと見え、頭から砂ほこりを浴び、手足には矢傷を受けている様子であった。

「殿は」

と聞いた吉次へ、駿河の次郎は、髭の生え放題になっている汚れた顔を輝かせて、

「おん大将には、ご安泰でござる」

「まず、中へ」

出迎えたあかねと共に、吉次は、駿河の次郎を奥へ招じ入れた。

戦況は聞かずとも、源氏の勝利、と吉次は、駿河の次郎の表情から覚っている。

湯を浴び、髭をそり、新しい小袖を着てから、改まった顔つきで駿河の次郎は、吉次とあかねの前に座った。

「明朝、源軍の飛脚、御所へ到着しよう。わしは、武藏坊などと祝いの酒くみ交して後、急ぎ立ち戻った」

「合戦の様子は」

「討取ったる平家の大將の首九つ」

と駿河の次郎は、手短かに一の谷合戦の様子を物語った。

「神器は」

と聞いた吉次へ、駿河の次郎は首を振って、

「四国の屋島に、内裏がある。この次の決戦は屋島攻めとなろうが、それについては味方に水軍の用意がなくてはかなわぬ。駿が都へお帰りなさるは明後九日になろうが、それをお迎えして後、わしはすぐに熊野へ参りたい。かの地の海賊に心易うしている者のあれば、船を集めたいと思う。ついては、金が要る。吉次どのの力を借りたい」

一気にいったが、吉次は、すぐには答えなかった。

「水軍にての決戦か」

と吉次は、つぶやいた。

「金は要るだけ使うてほしいが、船が間に合うかな」

「出来得るかぎり集める」

といつてから駿河の次郎は、口惜しそうに、

「こたびの一の谷合戦の前にも、わしは熊野へ行き、船を集めようと思うたが、殿のお許しになかった。法皇様のみ旨もあり、船いくさして神器に万一の事あつては、という殿の思し召しであらう」

「それだけではない」

吉次は、あかねと共に、駿河の次郎へ酒をすすめながら、

「申さば殿は、副将の地位ゆえ、兄上の蒲殿に何かとご遠慮もあらう。また、鎌倉殿のおん下知も守らねばならぬ。鎌倉に在すあいだ、殿は源氏の家人と同様に遇せられ給うたが、こたびの合戦が始まってより、いわば天馬が、囲みの中より飛び出たと同じ。源九郎義経という名將が、おのが望むままの働きをする時を得たことになる。しかし、合戦にも、殿は蒲殿に先陣を譲り、自らは後詰となつて川を渡られた。いま、そなたから聞いた一の谷の合戦にも、大手は蒲殿に任せ、西の方よりは軍奉行や土肥実平どのたちに攻めさせ、殿はわずか七十騎をひきい、敵の本陣へ逆落しに攻められたという。なぜか、判っているだらうな、次郎どの」

「判っている。われら古くよりおつき申す家来たちに、判らいて何んとする」

駿河の次郎は、太い眉を、ぎゅっと釣り上げるようにして、

「殿は事ごとに、鎌倉殿をはじめ蒲殿、それに軍奉行たちに、気がねをしておられる。いや、気がねと申すよりも、ご自分が先がけて最も危い戦い方をなさる。わしもいつぞや、おん大将

が真先に立ち給う事がござりましようや、と申し上げたことがある。そのとき殿は、九郎はそれが好きなのだ、と笑うて申された。だから、わしは殿の下にあって、功名手柄を立つるような華々しいいくさはせぬ、と決めた。地味で、人の目に立たずともよい、いささかでも殿のご苦勞を少うするお役に立てば、と思うからだ。その心持は、わしだけではない。武藏坊も伊勢の三郎も、みな同じだ」

一息にいつて駿河の次郎は、がぶがぶと酒をのんだ。胸の中にたまっているものを、どこへも持つて行き場がない、といった表情であった。

吉次は、黙って酒をのんでいたが、

「平泉にいたころが懐しいな」

「わしも、そうだ」

怒っているような声で、次郎は言い返して、

「平家を討ち負かしたあとは、殿に平泉へ帰って頂きたいと思う」

「それが出来ればのう」

と吉次は、ため息をつくようにいった。

「もはや、それは望めまい」

「なぜだな、吉次どの」

「宇治川の合戦、一の谷の戦いを経たる今、源九郎義経公という武將は、もはや鎌倉殿や蒲殿のおん弟というよりも、源氏の中に最も華々しいおん方となられ給うたのだ。殿が鎌倉殿の下知のままに従おうとなされても、まわりがそうはさせぬ。わしは、そなたと同様、殿に平泉へお帰りたいと思うている。だが、この京の都へ一たん留まったときは、抜き差しなら

ぬことになる。この数十年來の政變のため、強きに従い、弱しと見れば直ぐに離るるという公家が多いその上に、術策に長け給う法皇が在すのだ。わしとても、みすみす殿に木曾殿の二の舞おさせたくはないのだぞ」

駿河の次郎を前に、吉次が、こんなに激しい口調で話したことはない。

ほとんど今にも涙を流しそうに、吉次は、きらきらと眼を光らせ、声を震わせながら、言葉が続けた。

「十年前、わしが稚児の遮那王どのを陸奥へお伴い申したは、このおん方こそ、のちには源氏再興の旗頭となるべきお人、と思うたからだ。いわば、遮那王どという人を養にして、わしは博奕をする心であったのだ。遮那王どのは、源氏再興の心はない、と幾度も申されたが、年月が経てば、という望みが、わしの胸の中にあつた。しかし、平泉へ参つてからは、わしのその望みは次第に消え失せ、新しい喜びが生れて来たのだ。このおん方は、真実、戦いを好み給わず、源氏再興のことは伊豆の兄上に任せ、平泉にて穏やかに過したいと望んで在すのだ、と気がついた。それと、その後の殿のお美事な成長じや。わしはのう、次郎どの、おのれが見出した珠玉が、藤原秀衡公という大きな翼の下にて、ぐんぐんと健やかにのび、輝かしい光を放つてくるのを見て、うれしゅうてならなんだ。このお方は、いくさなどに出してはならぬ、源平の争いの中へ身を投げ入れ給うことがあつてはならぬ、と思うた。たまさか都へ商いに参り、平泉へ戻ったとき、殿のお姿を見奉って、ああまたこのように一段と美事に成り給うた、とこのれで鉄の心を持ったと思うているこの吉次が、涙を催おすほどうれしかったぞ。それが、それが、あの治承四年の秋」

ふっと吉次は、息をついた。

あかねも駿河の次郎も、黙っている。吉次の腹の中にあるものを、何もかも話させてやりた
い、と思う気持であった。

「鎌倉殿のお言葉を伝えられても、殿は腰をお上げなされなう。以仁王の令旨を承つても、
すぐ起とうとは申されなかつた。それが、東国へ下る、と言ひ出されたは、相州石橋山の合戦
にて鎌倉殿やぶれ給ひ、安房へ逃れられたと聞かれた時であつた。兄上の危急を知つて、はじ
めて殿は起たれたのだ」

駿河の次郎は、黙つてうなずいた。

四年前のあの時のことが、いま吉次の言葉を聞いているうちに、また新しい感慨を伴つて駿
河の次郎の胸によみがえつてきた。

「血につながる人々や家来に対しては、情にもろい、と秀衡公も、殿のことを陰ではお案じな
されていた。だが、あのときわしは、これでよいのだ、九郎義経というおん方は、この心持を
変えずに過すお方、とむしろお見上げ申した。だから、わしは殿の御出陣をおとどめ致さん
だ。伊豆の佐殿というお方は、一たんはやぶれ給うとも、このまま終る事はあらず、やがて東国
の兵を集め、華々しく平家に対して戦いをいどみ、源氏再興の旗を上げのお方、と秀衡公も見
て在した。わしもまた、そう考えていた。源平の合戦が堂々と始まるころを見計らい、九郎の
殿に陸奥の国の大軍をつけて東国へ下らせる、という秀衡公のお考えにて在したろうが、殿に
は、それまで待つお気持はなかつた。ただ兄上の危急を助けるために馳せ参じ、たとえ兵とし
ての扱いにてもよし、兄上の下にて働こう、と望まれたのじゃ。もはや、わしも殿をおとどめ
する心にはなれなう。しかし、しかし、のう次郎どの、わしは今になって、それを後悔して
いるぞ。なぜあのとき、懸命に殿をおとどめ申さなうのか。黄瀬川のご対面の後、鎌倉にて

源氏の家来と同様のお扱いを受け給うたは、なんのためか。わしは、いまの殿のお立場が、うわべの華々しさに隠れて、難かしい場合になっているのが、心配でならぬのだ。わかるか、次郎どの。わかるか。殿は、法皇様と側近の公家たちのため、抜き差しならぬところへ、まつり上げられようとして在すのだぞ」

不意にがくつと吉次は肩を落し、言葉を切った。顔を伏せ、吉次は、齒を食いしばっている様子だった。

吉次の日常を知っているあかねにも、また駿河の次郎にも、吉次がこれほど取り乱した態度を見せるのは、はじめてであった。

あかねも、吉次に声をかけようとはしなかった。年は吉次のほうが上なのだが、ときどき、あかねは吉次に対して、年上の女がするような、こういう振舞をすることがある。

さんざ相手に我まませせておいて、黙ってそっといたわってやる、ということに、あかねは慣れているらしい。吉次が、人には聞かせぬ本音を、あかねは耳にしているようであった。しばらくして、吉次は、ようやく顔を上げた。

恥しいところを見られたように、吉次は、照れくさそうに笑った。

「いや、何かと申したな」

と吉次は、いつもの語調を取り戻した。

「わしはな、次郎どの。殿が英雄にまつり上げられるのを、おそれているのだ。はっきり申すと、殿はいまだお若い。術策に慣れた公家たちを相手にする掛け引きは、ご存知ない」

「吉次どのの申すこと、判らぬではないが」

と駿河の次郎は、ひどく気難かしい顔つきになって、